OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベルクソンにおける身体概念
Author(s)	陀安, 広二
Citation	メタフュシカ. 1996, 27, p. 105-122
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66591
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ベルクソンにおける身体概念

陀安広二

はじめに

本稿において我々は、ベルクソン哲学の中で身体がどのように位置付けられているのかを検討する。身体が主題的に扱われる『物質と記憶』の身体概念の考察が中心となり、他の著作については関連する箇所をその都度引用することにする。

実のところ、ベルクソン研究においてその身体概念が主題的に扱われることは少ない。それは、ベルクソンの出発点が意識事象の持続を明らかにすることに存し、反対に空間の側に属すると思われた身体がベルクソン哲学のうちでまず否定的な要素として登場したことからみれば、理由のないことではない。しかし、『物質と記憶』では、単なる物体には還元不可能な身体の存在様態が論じられる。この身体は、『意識の直接与件についての試論』(以下『試論』と略す)の内的持続を継承する記憶論の単なる序論として導入されるのではなく、内的持続と外的事物との関係、あるいは心身結合といった『試論』ではさし措かれていた問題を解く重要な鍵となる。本稿では、『物質と記憶』の中にいくぶん錯綜した状態で含まれているいくつかの身体概念を整理し、それら相互の関係を明らかにしたい。加えて、身体に関係するいくつかの問題を取り上げ考察する。このようにして『試論』には見られなかった、あるいはむしろ未だ判明になっていなかった身体という現象の特異性を、『物質と記憶』を軸にして検討することにする。

一　イマージュとしての身体

『物質と記憶』の身体論には、「イマージュ」というベルクソン独自の概念が深く関わっている。私が知覚する事物は表象という観念的産物でもなく、事物の背後に控えていて知覚されな

い何ものかに還元されることもない。知覚される事物にそれ自身の存在を認め、かつ、それを知覚されるままの生彩豊かなものと看做すこと、それが「常識の立場」としてのイマージュ論である。「私は、この語に付与しうる最も漠然とした意味におけるイマージュ、私が感官を開けば知覚され、閉じれば知覚されないイマージュを前にしている」(MM11)。身体がイマージュであるのはたしかである。私は他人の身体を知覚し、また「私の身体」を知覚する。

ベルクソンによれば、「私の身体がそれに近づくか遠ざかるかによって、外的諸対象の大きさ、形、色そのものが変化する」(MM15)。また「私の視界が広くなるに応じて、私を取り巻いている諸イマージュはより単調な地の上に描かれ、私には無関係になるようにみえる。私が視界を狭めれば、その分だけ、視界の限定する諸対象は、私の身体がそれらに触れたりそれらを動かしたりする容易さに応じて判明に配置される」(ibid.)。この意味において、「私の知覚」は「私の身体」の潜在的・可能的行動を「影絵あるいは反射影といった仕方で」(MM16) 描いている。ところで知覚がその可能的行動を反映している身体とは何だろうか。なるほど、身体は一イマージュとして知覚される。しかし、「私の知覚」において「私の身体」の可能的行動が反映されるという場合、その「私の身体」とはいわば知覚の成立を可能にしている身体として理解されなければならない。知覚対象としての身体と知覚を可能にしている身体との区別こそ、心身平行論や付帯現象説などに対抗してベルクソンが主張するイマージュ論の支柱を成しているのである。

『物質と記憶』第一章の冒頭で、ベルクソンは「私の身体」の様相を次のように記述する。正反対の方向に向かう求心的神経と遠心的神経の連結点に、神経中枢つまり脳が位置し、求心的神経から脳へ、脳から遠心的神経へと振動 (ébranlement) あるいは運動が伝達される。遠心的神経へと伝達された振動は最終的に身体の運動となり、こうした求心的神経と遠心的神経の複合体が「私の身体」にほかならない。

しかしながら、ベルクソンは、「私の身体」の含みうる意味のすべてが生理学的な見地から考察された身体に還元可能だと考えているのではない。事実、「ここで私は、私が私の身体と呼ぶこの特殊なイマージュの構造を、私のもの (私の身体) と類似した諸物体について調べることにする」(MM13) という断りを挿入することによってベルクソンは、神経複合体としての身体とは、「私の身体と類似した諸物体」についての考察からアナロジーによって理解された「私の身体」の姿であり、「私の身体」のもちうる様相の一つ、すなわちイマージュという様相にすぎないということを明示しているのである。

イマージュとしての身体と知覚との関係をベルクソンは次のように考える。求心的神経から神経中枢を通って遠心的神経へ

と続く神経系は、運動の伝達をその役割としている。ところで求心的神経を切断すれば、運動の流れが遮断される。その一方で、神経の切断によって知覚が消失する。つまり神経の切断という一つの事象に対して、運動あるいは行動の抑止と知覚の消失という二つの事象が生ずる。したがって、神経系の生理学的な働きと知覚とのあいだには或る種の対応関係はあっても、知覚を神経系の生理学的な働きに還元したり、ましてやただちに両者を同一視することはできない。

これに対して、知覚を神経系から導出できると考えるのが心身平行論である。ベルクソンによれば、心身関係についての学説は平行論と付帯現象説に集約される。そして両者は最終的には同じ内容、「ある超人間的知性があり、人間の脳を構成している原子の往復運動を眺め、心理＝生理学の鍵を握っているならば、その知性は、働いている脳の中に、対応する意識において起こることのすべてを読み取ることができるだろう」(ES191-192/cf. MM4) ということを主張するのである。

ところで世界の知覚が脳内運動から生じるという心身平行論の立場をとるためには、まず脳内運動を宇宙全体から孤立させて、「それ自身で自己充足しているもの」(MM19) と看做さなければならない。しかし、ベルクソンによれば、脳内運動という一対象は、「その物理的諸特性を他のすべての対象と保っている諸関係に負っており、対象の規定の各々、したがって対象の存在そのものを、それが宇宙全体の内で占める位置に負っているはずである」(MM19-20)。脳内運動を孤立させることは「虚構」(MM19) にすぎないのである。脳内運動という一イマージュは「他のイマージュの全体と連帯することによって、それに先立つイマージュに引き続き、同様にそれに続くイマージュの中に連続している」(MM32-33)。ところで、我々の意識的知覚は、この連続を断ち、特定のイマージュを孤立化させることに存する。脳内運動はこのようにして孤立化された一イマージュにすぎず、よって知覚にその存在の根拠を負っているこのイマージュが、反対に知覚自身を条件付けることはないだろう。上述した二つの身体の区別に戻っていえば、脳内運動とは知覚された身体であり、また、「私の身体と類似した諸物体」についての考察からアナロジーによって理解された「私の身体」である。この身体は、平行論の考える身体とは違って、知覚を導出したり条件付けることはない。イマージュとして知覚される身体は、いわば知覚を可能にする身体から明確に区別されなければならない。

ベルクソンによれば、知覚対象に「絶対的に規定される輪郭」を与えて「諸物体」として知覚することは、すべて人為的分割である (MM220)。また、物体の不可入性 (impénétrabilité) とは論理的次元に属する観念にほかならないから、物体の固体性は物質の本性には属さない。(1) 神経複合体として明らかになっ

た「私の身体」も、「諸物体」として人為的に裁断され知覚された物体であり、我々が不可入性を観念的に帯びさせた物体にすぎない。なるほど脳内運動は、一見、この種の物体性には還元されない身体の存在の仕方を提示しているようにみえる。しかし、結局この身体も、物体が存在する仕方と同じ仕方で存在するにすぎない。脳内運動とは純粋な運動の体系ではなく依然として或る粒子の運動の体系ではないのか、ということを問題とするのではない。物質が究極においてどのように存在するかを問うことは我々にとっては不毛であろう。そうではなくて、脳内運動としての「私の身体」が物体としての存在の意味を超えることは論理的にいって不可能なのである。なぜなら、「私の身体」の存在様態の考察において問題となるのは、固体なのか固体でないのかではなく、「私の身体」がイマージュであるのかそれともイマージュの意味を超えるのかについてだからである。ベルクソンが物質を「イマージュの総体」と定義した(MM17)ことからみると、たとえ固体的なものから自由になった脳内運動が考えられるとしても、脳内運動は依然としてイマージュである。このイマージュはイマージュの総体のうちで限定されたものであるから、限定を遂行する特権的イマージュを前提とする。この特権的イマージュは単なるイマージュという意味を超えて存在しなければならない。限定されるイマージュと限定を行うイマージュとの区別は、知覚された身体と知覚を可能にする身体との区別に対応する。

この観点から『試論』に目を向けてみると、『試論』の身体概念は概して知覚対象としての身体のレベルにとどまっている。第一章では、意識事象の「強度」について語ることの誤謬が論じられ、その原因の一つに身体的要素の介入が指摘される。怒りという意識状態についていえば、「その状態そのものの強さの増大とは、身体組織の動揺が深くなることにほかならず、その動揺を意識は身体組織と関係する身体表面の数と拡がりによって容易に計測する」(DI22)。「身体表面の数と拡がり」は、「還元不可能な心的要素」(ibid.)あるいは「観念」(ibid.)であるところの質的な意識事象を量的に表象する要因となる量的要素である。計測される限りでの身体的要素は、『試論』第二章でいえば、数的多数性つまり空間的表象に属するはずである。身体は「内的自我」と外的世界との接触面を成すがゆえに、量的な世界である外的世界の影響の下にある。身体は、その表面の「数と拡がり」を数え上げることのできるものであり、自我の外部に属するもの、つまり外的世界に存在する事物と同じ仕方で知られるといえる。(2)

このような『試論』の身体に対して、『物質と記憶』を経た後の『創造的進化』では別の分析がなされる。身体とは何よりもまず有機的身体、生物体であることに留意するならば、『創造的進化』第一章でなされる無機物と生物についての分析を身体論

と解釈することは可能だろう。

無機物はわれわれに個々の物体として、すなわち知覚対象として与えられる。知覚が人為的分割ならば、物体とは「人為的な系」(EC22)といえるだろう。一方、「孤立した諸物体への物質の細分がわれわれの知覚に関わり、諸々の質点から閉じた系を構成するのがわれわれの科学に関わるのに対して、生物体は自然自身によって孤立させられ閉じられたのである」(EC12)。生物体は「自然的な系」(EC22)であり、また異質な諸部分と多様な機能から構成される「個体」である。反対に、どこを切り取っても等質的な水晶の塊はそのような意味では「個体」とはいえないだろう。ただこの議論は、生殖の過程や多生現象(polizoïsme)において個体を決定しようとするとただちに困難に陥る。もちろんベルクソンは様々な困難をあらかじめ予想していて、「個体」には無数の段階があり、生物は〈個体化の傾向〉をもつのだと考える。またさらに、「個体」の議論に困難を見出す人は、無機的物体に関してのみ当てはまる「一か多か」という思考法を有機体について適用しようとしているのだといって逆に非難する。しかし有機体がはじめは一で、後に多になるとしても驚くにはあたらない(EC14)。なぜなら、むしろ一性と多性の二重の方向に進化するということが、生命の本質に由来するからである(EC261)。

生物体についての以上の議論は、ベルクソンの生命論に合致するものであり、それ自体としては肯定できるものである。しかし、『物質と記憶』の身体論との関係で捉え直せば、この説明は依然として一イマージュとしての生物体の構造の分析にとどまっているといえる。すなわちそれはいわば消極的説明であり、その内実は、生物体は単なる無機物の構造には比較しえない独自の構造をしており、無機物を扱う際の「一か多か」という思考法ではそれを解明するのは不可能だとしか述べていないに等しい。言い換えると、このように諸部分の異質性による生物体の定義は、「観察可能な存在」(EC15)である限りでの生物体についての「外的」知覚に基づいた説明である。外的観察は、生物体を神経系における物理・化学的現象の総体に還元してしまうことに通じる。要するに、知覚されるイマージュとしての生物体あるいは身体の様相とは単なる物体の様相にほかならない。

生物体が「自然的な系」を構成する理由は別になければならない。「無機的な諸物体は自然という生地の上で知覚によって裁断され、知覚のはさみはいわば行動が通過する点線を辿る、とわれわれは述べた。しかし、この行動を遂行する物体、現実の行動を為す前に、すでにその潜在的行動の素描を物質に対して投射する物体、実在の流れにその感覚器官を向けて、実在を一定の形態に結晶化させ、こうして他のすべての物体を創造する物体、すなわち生物体は他の物体のような物体だろうか」(EC

12)。ベルクソンの記述に忠実にしたがえば、生物体あるいは身体は、知覚の主体、行動の主体である限りにおいて、無機的物体から区別されるのである。生物体とは「個々の意識に与えられた、行為によって自己現出する能力」(MM221) が要求する物質的地帯であり、その系が閉じているのは行為の源泉だからである。

二　行動の中心としての身体

すでに述べたように、『物質と記憶』において「私の身体」はまず神経複合体として理解され、求心的あるいは遠心的神経の役割は運動の伝達として理解される。この身体の様相は物体あるいはイマージュとしての身体の様相である。単なる物体という意味を超えた身体の存在様態はまず、運動の返し方を選択するように思われる (paraître choisir) イマージュとして「私の身体」が他の諸物体から区別されることによって表明される (cf. MM14)。選択するように思われるという控えめな記述に着目することによって、それを物体的身体から非物体的身体への移行の局面と理解することも可能だろう。

ベルクソンによれば、或るイマージュは二つの異なったイマージュの体系に同時に属しうる (MM20-21)。宇宙というイマージュの体系と宇宙の知覚というイマージュの体系である。前者の体系に属する限りにおいて、各イマージュは原因が結果に等しいという仕方で相互作用の関係にある。自然法則に支配されるこの体系は科学の領域に属するといえる。一方、後者の体系に属する限りにおいて、すべてのイマージュは或る特権的イマージュに付き従う (régler sur)。特権的イマージュのかすかな変化によってすら、他のイマージュのすべてが変化する。この特権的イマージュ、中心的イマージュが「私の身体」である。さて、イマージュである限りにおいて、「私の身体」もこれら二つの異なったイマージュの体系に同時に属しうるはずである。前者の体系に属する限りにおいて、「私の身体」は他の諸イマージュと同様に自然法則に従う。諸イマージュの間の相互作用は「必然的作用」(MM15) であり、「私の身体」もそのような「必然性」(MM33) の中で作用し反作用する。神経複合体あるいは脳内運動として理解される「私の身体」は、宇宙という体系に属する何の変哲もない一イマージュでしかない。一方、後者の体系に属する限りにおいて、「私の身体」は特権的イマージュであり、中心的イマージュである。「特権的」あるいは「中心的」という意味を過小に考えてはならない。そもそも宇宙の知覚というイマージュの体系そのものが「私の身体」によってはじめて可能になるといえるほどにまで、「私の身体」は「特権的」なのである。いわば、「私の身体」はその比類なき特権性によってこの第二のイマージュの体系を開くのである。「私の身

体」のこの様相が、先に我々が知覚を可能にする身体と仮に述べておいた身体の様相である。

宇宙についての「私の知覚」は「私の身体」の可能的行動を反映する。反対に、宇宙というイマージュの体系に属する諸イマージュ間の相互作用は「必然的作用」であるがゆえに、諸イマージュはあらかじめ可能な作用を素描し選択する必要はない。したがって、「私の身体」が可能的行動を描くということは、「私の身体」のみが「必然的作用」ではなく「現実的かつ新しい作用（行動）(action réelle et nouvelle)」(MM14) を遂行しうることを意味する。「私の身体」の介在によってはじめて宇宙に本当に新しいものが生じうるのである (MM12)。

換言すれば、「私の身体は、諸物体を動かす (mouvoir des objets) ように定められた物体として、行動の中心 (centre d'action) である」(MM14) ということである。宇宙というイマージュの体系において中心的イマージュが存在せず、各イマージュがそれぞれに「絶対的価値」(MM21) を有するならば、その体系に運動が存在したとしても一方のイマージュが他方を「動かす」とはいえないだろう。他の諸物体を真の意味で「動かす」ことができるのは、「行動の中心」あるいは「行動の源泉」(MM63) としての「私の身体」のみである。

「私の身体」はその可能的行動を「私の知覚」として他の諸イマージュに反映する。それはすなわち、「私の身体」が他の諸イマージュに「現実的かつ新しい行動」を為しうること、「私の身体」が他の諸イマージュを「動かし」うることを意味する。しかしこれらのことは、「私の身体」自身がなによりもまず「自ら動く (se mouvoir)」(MM44) という「運動的活動性 (activité motrice)」(MM43 et suiv.) を有することを前提する。知覚の真の存在理由 (raison d'être) は、「自ら動く」という身体の傾向に存するのである (MM44)。

三　情感の座としての身体

ところで、私はこの非物体的な「私の身体」をどのようにして知るのか。イマージュとして知覚する知り方はすでに却下された。知覚という知り方は「外からの (du dehors)」(MM11) 知り方であり、「表層的に (à sa surface)」(MM63) 知ることであり、「私の身体」の「表層的な皮膜 (pellicule superficielle)」(ibid.) を知ることにすぎない。ベルクソンによれば、他のイマージュから「私の身体」が区別されるのは、その知り方の特異性によってである。すなわち、私は「私の身体」を知覚によって外から知るのみならず、情感 (affection) によって「内から (du dedans)」(MM11) も知る。

では「私の身体」を情感によって知るとはどういうことか。ベルクソンは知覚と情感との本性の差異を繰り返し主張してい

る(MM56,59,etc.)。いくつかの比喩的表現には固執せず、両者の差異をまとめると次のようになる。第一に、知覚は身体の可能的行動を示すのに対して、情感は身体の現実的行動(action réelle)を示す(cf. MM58)。第二に、知覚は身体の外部に位置付けられるのに対して、情感は身体の内部もしくは表面に局在する(ibid.)。また、ベルクソンは、知覚と情感の差異を示すために、知覚から情感に移行する瞬間があることに言及する。「刺激を徐々に増大させると知覚が痛みに変容することには異論の余地はない。が、変容が明確なある瞬間に生じることも確かである」(MM55)。ところで、知覚と情感との差異についてのこうした説明は誤解されてはならないだろう。一見、情感をまったく欠いた知覚から情感的感覚へと、すなわち可能的行動から現実的行動へと我々は移行するようにみえる。そこから、知覚において描かれる可能的行動と情感の示す現実的行動との差異は、行動の表象と行動そのものとの差異のようにみえるだろう。しかし身体の可能的行動は行動の表象ではない。知覚において、身体は身体自身のもつ「運動的活動性」すなわち「自ら動く傾向」を可能的・潜在的行動として対象に反映しあるいは描いていたのだが、こうした知覚が可能であるためには「運動的活動性」が現に働いていなければならない。しかし、知覚においては「運動的活動性」は意識されていなかった。一方、情感においては、身体のもつその「運動的活動性」すなわち「自ら動く傾向」が現実的行動つまり現に働きつつある行動として意識されることになる。すなわち身体の「運動的活動性」は情感によって「内から」直接に知られるのである。

同じことを、『試論』においてベルクソンは「快感や痛みが、通常考えられているように、身体組織の中で起こったばかりのことや起こることのみを表わすのではなく、そこで生じるであろうこと、起こりつつある(tendre à se passer)こともまた示さないかどうか」(DI25)と問うている。ベルクソンの考えでは、情感的感覚は「完了した(avoir été)」身体的運動に対応するのではなく、「生じつつある(se préparer)運動」に対応する(ibid.)。このことは、情感的感覚が身体的運動の「意識的表出(expression consciente)」(DI24)あるいは「内的反響(retentissement interne)」(ibid.)、すなわち身体的運動の「翻訳(traduction)」(DI26)ではないということを意味する。たしかに、知覚において描かれる「私の身体」の可能的あるいは潜在的行動は、すでに過去になった運動、すなわち行動の翻訳や表象ではない。その意味において、知覚において描かれる可能的行動は身体のもつ「運動的活動性」の何ものかを保持していると考えられる。しかし、「私の身体」の「運動的活動性」は何よりまず情感によって「内から」知られる。

私は「私の身体」のもつ「自ら動く傾向」を情感によって「内から」知る。否、むしろ、「自ら動く」ことと情感によってそれ

を「内から」知ることとは不可分である。ベルクソンによれば、「私の身体」が中心的イマージュとなるのは、行動を為し情感を感じるという身体の「二重の機能 (double faculté)」(MM62) によってである。身体が行動を為すこと、すなわち「現実的かつ新しい行動」を為すこと、他の諸物体を「動かす」ことは、身体が「自ら動く」ことを前提する。そして「自ら動く」ためには、身体が「自ら動く」身体自身を知っていなければならない。しかも知覚によって「外から」知るのではなく、情感によって「内から」あるいは「深みにおいて (dans ses profondeurs)」(MM63) 知らなければならない。したがって、身体のもつ「二重の機能」つまり「感覚＝運動能力 (pouvoir sensori-moteur)」(ibid.) とは、「情感の座であると同時に行動の源泉」(強調筆者) (ibid.) であるという意味で不可分な一対の機能として理解されなければならないのである。たとえば痛みとは「ある一つの感覚神経における一種の運動的傾向 (tendance motrice)」(MM56) であり、「局部的な努力である (être un effort local)」(ibid.) とされたとき、情感と行動とのこの不可分性あるいはむしろ不可弁別性が主張されているのである。

四　身体と現在

われわれは情感の示す身体の現実的行動において、身体のもつ「自ら動く傾向」あるいは「運動的活動性」の現れを見出した。それは、情感において「運動的活動性」が意識されるということである。ところで、「運動的活動性」の意識とはすなわち「私の身体」の意識であり、ベルクソンによれば、「私の身体」の意識に「私の現在」は依拠する。「私の現在」と「運動的活動性」との関係を明らかにしよう。

『物質と記憶』第三章でベルクソンは現在を定義する。数学的瞬間ではなく、「現実的、具体的、生きられる現在、私が私の現在の知覚について語るとき私が語っている現在」(MM152) である限りでの「私の現在」とは、「私が私の身体についてもつ意識」(MM153) に存する。「私の身体」は「感覚と運動が結合した体系」(ibid.) である。ベルクソンによれば、感覚とは「直前の過去 (passé immédiat)」(ibid.) であり、運動とは「直後の未来 (avenir immédiat)」(ibid.) だから、「私の現在」は「直前の過去の知覚 (perception du passé immédiat)」であると同時に「直後の未来の決定 (détermination de l'avenir immédiat)」である (ibid.)。

「直前の過去」とは「知覚される限りにおいて (en tant que perçu)」感覚である (ibid.)。「私の現在」において私が「直前の過去」を知覚すること、それはすなわち感覚するということと同義である。加えて、ここでの感覚は、「要素的振動の非常に長い継起」を「翻訳する」という限りにおける感覚である (ibid.)。

感覚における「翻訳」は、「収縮 (contraction)」(MM74) としての記憶力[3]が、我々の知覚に感覚質 (qualité sensible) を生じさせることと理解することができる。ところで、「私の現在」は「直前の過去の知覚」であると同時に「直後の未来の決定」であるとはいえ、ベルクソンによれば「私の現在」の大部分は「直前の過去」に存する (MM166)。

ここで一つの仮説を立てることにする。「私の現在」は「私が私の身体についてもつ意識」に存するのであるから、「私が私の身体についてもつ意識」も、その大部分は「直前の過去」に存するといえる。「直前の過去」は知覚される限りにおいて感覚である。とすれば、「私の現在」において意識される「私の身体」とは、感覚質を伴ったイマージュとしての身体ということになるのだろうか。事実、この身体は「我々の表象の変わらずに再生する部分」(MM168) あるいは「常に現在である部分」(ibid.) であり、したがって「絶えず再開する現在」(MM154) としての物質と同じ水準にある。身体は「我々の存在の物質性そのもの (matérialité même de notre existence)」(ibid.) を露呈するにとどまるだろう。身体の物質性とはイマージュとしての身体のことであり、「行動の中心」としての身体から区別されるべきである。ゆえに、「私の身体」は、「あらゆる瞬間に過ぎ去ったばかりの部分」(MM168) という特殊な意味においてであるにせよ、やはり或る種の過去性を帯びていることになり、「私の現在」において意識される身体とは身体の「運動的活動性」の残滓にすぎないようにみえる。

ベルクソンはたしかに、「私の現在」の大部分が「直前の過去」すなわち知覚される感覚質に存すると述べた。しかし、「直前の過去」は、まさに直前の過去性として、我々には「直後の未来」と同時に意識される。また、感覚は運動とともに「不可分の全体」(MM153) を成し、「私が私の身体についてもつ意識」とはその「不可分の全体」において感覚と運動とが私にとって同時に与えられる意識なのである。したがって、先程の我々の仮説、「私の現在」において意識される「私の身体」とは感覚質を伴ったイマージュとしての身体であるとする仮説は、感覚と運動とのこうした不可分性を考慮することによって修正されなければならないだろう。なるほど、身体は「常に現在である部分」であり、その意味で「絶えず再開する現在」としての物質と同じ規定を受けるようにみえる。また、物質的世界は生成に対して知覚の切り取る瞬間的切断面であり[4]、身体はその同じ切断面の中心を占める (MM81, 154)。しかし、身体が切断面の中心を占めるということは、身体自身が瞬間的切断面をあらゆる瞬間に形成する (constituer) (MM168) という意味に理解しなければならない。身体は単に「常に現在である部分」ではなく、現在であることすなわち物質性を常に生み出しつつある当のものであり、かつ、自らも物質性の何ものかを帯びるのである。

感覚と運動が「不可分の全体」を成し、意識に対して同時に与えられることからすれば、「私の現在」において与えられる身体についての意識とは、前節ですでに述べたような「情感の座であると同時に行動の源泉」(MM43)という不可分な一対の機能を保持した身体の意識だろう。「私の現在」において、身体の「運動的活動性」は(情感的)感覚によって「内から」知られるのである。

繰り返して、仮説を論駁しよう。もし、感覚質をイマージュに備わったものと考えるならば、「私の現在」において意識される「私の身体」とは感覚質を伴ったイマージュとしての身体であるとする仮説が立ちうるだろう。しかし、感覚質とは「収縮」する記憶力の働きによって生ずる知覚イマージュの主観的側面である。なるほど、記憶力の働きは、知覚の主観的側面に関わるものとして、当初「純粋知覚」から取り除かれていた。しかし、「現在に没入し」(MM31)、「物質についての直接的であると同時に瞬間的なヴィジョンを得る」(ibid.)といわれた「純粋知覚」は、後に、「われわれの純粋知覚は、どんなに速いものと想定したところで、実際は持続のある厚みを占めるのであり、したがって継起的なわれわれの知覚は諸事物の現実の諸瞬間ではなく、(…)われわれの意識の諸瞬間である」(MM72)と捉え直される。意識の瞬間として捉え直された「純粋知覚」はすでに「生彩豊かな(pittoresque)」(MM2,73)イマージュであり、そしてイマージュのこの異質性を生じさせるのが「収縮」する記憶力である。したがって、感覚質が感じられるということは、むしろ感覚質を生じさせる「収縮」する記憶力の働きが知られるということを意味するのである。

記憶力が一般に主観性を意味するならば、「収縮」する記憶力も或る種の主観性を意味するだろう。この主観性は、過去の出来事をイマージュとして思い出す記憶力に固有の主観性ではなく、「意識の瞬間」が必ず「持続の或る厚み」を占めること、言い換えれば、「私の現在」が決して数学的瞬間とは一致せず常に「持続の或る厚み」を占めることを可能にしている主観性である。「私の現在」が「私が私の身体についてもつ意識」に存するならば、持続する「私の現在」を可能にする「収縮」する記憶力の主観性は「私の身体」に内属する主観性だといえる。そして、この主観性は感覚質として感じられることによって、自らを「内から」知るのである。

では「感覚=運動的」身体はどのような主観性を導入するだろうか。ベルクソンによれば、「直後の未来とは自己決定する限りにおいて(en tant que se détermine)行動あるいは運動である」(MM153)。「私の現在」において、私の「直後の未来」は自己決定性をもつ。そしてこのことはすなわち、「私の身体」が運動することを指すのである。ここからさらに、身体の運動そのものが自己決定性を帯びているといえるだろう。「(…)私

の現在は感覚であり同時に運動である。そして私の現在は不可分の全体を成すから、この運動はこの感覚に由来しなければならないし、この運動はこの感覚を行動へと引き延ばさなければならない」(ibid.)。ベルクソンの記述にしたがえば、運動は、感覚に「由来する」一方で、感覚を行動へと導く当のものである。この一見奇妙にもみえる事態のうちに、我々は身体の運動の自己決定性すなわち「自ら動く」身体の卓越した力を見ることができるのではないか。

五　身体と習慣

身体の「運動的活動性」の内実は、身体が「自ら動く」ということ、身体が自己決定性を伴って運動することにある。ところで、身体は「意志の非決定性 (indétermination du vouloir)」(MM39 et suiv.) の象徴であり、身体とは「自由」(MM34) の同義語である。したがって、身体の運動は単なる自動性ではなく、意志的な何ものか、あるいは自由の何ものかを保持した運動である。しかし、身体的運動が意志的だという場合、その〈意志〉は限定された意味において解されなければならない。我々はこの問題を、習慣と身体的運動との関係において考えることにする。

ベルクソンは、或る箇所で、知覚を身体の「運動的活動性」に対して提起される問いと看做している (MM43)。そこから、問いが提起される度ごとに、身体はその「自ら動く傾向」によって「現実的かつ新しい行動」を遂行すると考えられる。これに対して、問いに対する一定の解答を身体が準備しておいたときには、身体の為す行動は「現実的かつ新しい行動」とはいえないだろう。習慣の確立とはこの事態を意味し、ベルクソンの考えでは、「すっかり準備された解答」は問いを不要にするがゆえに習慣は知覚を減退させる (MM43, cf. MM100)。ベルクソンのこの考えをさらに押し進めるならば、知覚の減退は「運動的活動性」の減退あるいは硬直化を意味し、結局、習慣の形成は身体の「運動的活動性」の対極に位置するということになる。だとすれば、身体が「非決定性の中心」(MM33, 36, 65-66) であり、「意志の非決定性」の象徴と看做され、「自由」との同義性において語られるのは、身体があらゆる習慣化から免れている限りにおいてなのであろうか。

ところで、習慣は一般に、〈一定の刺激に対して一定の反応を自動的に為すメカニスムを反復によって獲得すること〉と定義可能だろう。我々の考えでは、この定義は少なくとも二つの面で問題を含んでいる。そして、ベルクソンの身体論がそれらに対して解答を提示するのである。第一に、一定の刺激に対する一定の反応を身体が為すといったとき、異なる瞬間、異なる状況において受け取る刺激、したがって〈異なる刺激〉を身体

が〈同じ刺激〉として分類することを前提とするが、その仕組みは一体如何なるものなのか。第二に、一連のメカニスムが反復によって獲得されるといったとき、獲得のための個々の反復はそれぞれ〈異なるもの〉を反復しているはずである。なぜなら、反対に〈同じもの〉を反復しているのであれば、習慣は最初の刺激と同時に獲得されていたことになり、反復は無意味になるからである。ところが、〈異なるもの〉の枚挙がなぜ一定のメカニスムの形成へと収斂するのだろうか。

第一の問題に対する解答。ベルクソンによれば、習慣と行動の関係は一般性と思考の関係に置換可能である（MM173）。すなわち、習慣とは、行動の次元における一般性の認識であるといえる。この認識は、まず「個別的なもの（l'individuel）」を知覚し、次にそこに分有されている諸性質を抽出するといったやり方で行われるのではない[5]。身体の有する傾向や欲求に従って類似や諸性質へと「真っ直ぐに」（MM176）向かうのであり、したがって、何ら「心理的性質の努力」（MM177）も介さずに、或る意味で「全く物理的な法則」（ibid.）に従っている。よって、ここでは個々の刺激の個別性や差異は区別されていない。習慣は〈異なる刺激〉の知覚から出発して獲得されるのではないのである。

第二の問題に対する解答は「運動図式（schème moteur）」（MM121, 127, 129, 140）論[6]によって示される。ベルクソンは言語の習得の例を引いている。ベルクソンによれば、言語の理解とは、記憶の中に言葉の聴覚的記憶を蓄え、聴覚に与えられた音の印象をそのうちの適切な記憶に対応させることではない。なぜなら、もし音の印象がまず雑音（bruit）として与えられるならば、膨大な聴覚的記憶の中からなぜこの雑音と結びつく特定の記憶が選択されるのか説明不可能だからである。事実、最初に雑音として与えられる印象は、何度反復されたところで雑音にすぎないだろう。「もし知覚される音がすでに分離され、区別され、結局音節と語（mot）として知覚されていたのでなければ、どうしてそれらは記憶力に語りかけ、どうして聴覚的イマージュの倉庫でそのうえに取りつくものを選択するだろうか」（MM120）。耳は単に雑音を聴くのではなく、すでに語を聴き分けるのである（ibid.）。言い換えれば、音の印象は我々に対して、「聴こえた句を音節に区切り、その主要な分節を際立たせることができる生まれかけの運動」（MM121）を組織する。この運動をベルクソンは、聞こえる発話の「運動図式」と呼んでいる。

「運動図式」は「潜在的分解（décomposition virtuelle）」（MM122）として与えられる。すなわち、何度も反復され、その結果、細部の運動的分節がしだいに際だっていく過程を潜在的に含む、未だ〈現実には〉分節されざる全体として与えられる。運動の分節化は「運動図式」の中に「傾向」（MM121, 125）としてすでに含まれていたのである。この意味において、運動の分

節化と分解は「運動図式」に内属する「自律（*autonomie*）」（MM122）の現れである。反復されるのは〈異なるもの〉ではなく、運動の「本質的なもの（l'essentiel）」（MM122, 123）である限りにおいて「同じもの」（MM122, cf. MM84, ES166）でさえある。しかしながら、反復されるのが「運動図式」であり、また「生まれかけの運動」である限りにおいて、それはまったく〈同じもの〉の反復ではない。マディニエの指摘するように反復は「自律」以上のものを含むのであり[7]、反復の度に運動が「分解」と「再構成」を繰り返す（MM122）ことによって身体の新たな運動習慣の獲得が可能となる。

我々の反作用とは「遂行されるものにせよ、あるいは単に生まれかけのものにせよ、常に多かれ少なかれ適合した（toujours plus ou moins appropriées）反作用」（MM168）であると述べることによって、ベルクソンは習慣に纏わる以上の問題を看破したのである。事実、もし運動的習慣の確立が、無秩序な運動を受容し、次いでそれらの運動を秩序づけるといった仕方でなされるのであれば、上述の困難を免れ得ないだろう[8]。身体的運動は、運動の混沌から運動の秩序へと向かうのではなく、はじめから「多かれ少なかれ適合した」運動、したがって多少とも秩序づけられた運動なのである。言い換えれば、運動ははじめから「多かれ少なかれ所有された」運動であり、「生まれかけの自動性（automatisme naissant）」（MM101）を呈しているのである。

身体的運動がはじめから〈生まれかけの習慣化〉を保持しているならば、身体的運動に対する習慣の存在意義を見直す必要があるのではないか。いま便宜的に、視覚的印象と、触覚的印象すなわち身体の「生まれかけの運動」との関係に置き換えて考えると、我々の通常の知覚では、或る視覚的印象には特定の触覚的印象が引き続こうとする。両者は一種の習慣的連合の関係にある。ところで、ベルクソンによれば、この習慣的連合の内実は、単なる因果関係、「平板な連合作用（acte d'association quelconque）」（M425）、「平板な習慣（habitude quelconque）」（ibid.）ではない。それはむしろ、「我々の意志による我々の行為の産出」（ibid.）に比較しうるような「動的な関係（relation dynamique）」（ibid.）である。視覚的印象と触覚的印象との習慣的連合は、「我々の生の構成部分を成す習慣」（ibid.）であり、「我々の神経系のもつ根源的な活動性（activité fondamentale）がめざす働き」（ibid.）なのである。

ここに至って、習慣の形成は、単に身体の「運動的活動性」の減退ではなくむしろ「運動的活動性」が要請するものということになる。身体の「生まれかけの運動」は、たしかに「自動的に」、「機械的に」、またあるいは「反射的に」為される。しかし、そういわれるのは、身体の「生まれかけの運動」があまりにも「根源的」な活動性に関わっているからである。この活動

性は「初歩的弁別 (discernement rudimentaire)」(MM126) であり、「意志と自動性との境界 (limite entre la volonté et l'automatisme)」(MM128) に位置する。[9] 自動性から意志への移行の最初の局面に関わるがゆえに、それはまた「身体によって生きられる必然性」(M428) ともいわれうるのである。

六　自由と本能

『物質と記憶』第一章で「私の身体」との同義性に於いて語られる「自由」もこの文脈において解さなければならないだろう。この自由は生物一般に於ける感受性 (sensibilité) のことである。感受性の内実は、「空間内で自ら動く能力を生物に与えた自然が、種に対してそれを脅かす危険一般を感覚によって告知し、それから逃れるための注意を個体に委ねる」(MM12) ことにある。たしかに、生物が自ら動くことすなわち「感覚的自発性 (spontanéité sensible)」は、「感情と観念の総合」(MM207) としての人間の自由行為に固有の自由ではない。[10] しかし、後者の「真の自由」(DI125) が可能になるためには、「意志と自動性との境界」に位置する感受性が自由の最初の一歩を刻印しなければならない。

『創造的進化』でベルクソンは、動物一般に関して、「最も下等な有機体も、それが自由に自ら動く程度に応じて意識的である」(EC112) と書いている。最も下等な有機体にすら認められる「自ら動く」能力とは、反射的なものの機械的な正確さと意志的なものの知的躊躇とをわずかな程度ずつ分有するなにものかである (ibid.)。反射活動と意志的活動という区別は神経系の発達に応じて明確になってきたものにすぎず、有機体の「自ら動く」活動性は両活動がそこから分化してくる〈原初的活動〉なのである。また、この水準における「自由」が、上述したように「感受性」であることを考慮すれば、ここでの「意識」の意味は限定されたものとなる。この意識は本能に固有の意識であるが、それは通常、無意識と呼ばれうる意識である。ベルクソンによれば、本能の無意識は「無くされた意識 (conscience annulée)」(EC144) である。「無い意識 (conscience nulle) と無くされた意識はどちらも零に等しい。しかし、第一の零が何も存在しないことを示すのに対して、第二の零は、反対の方向をもつ二つの等しい量が相殺し、中和していることを示す」(ibid.)。落下する石の無意識は「無い意識」である。それに対して、本能の無意識は、「行為の表象が行為自身の遂行によって阻止されることに起因する」(EC145)。石の無意識が必然性と同義だとしても、本能の無意識は単なる必然性以上の何ものかであろう。ベルクソンは本能の無意識と習慣的行動の無意識とを同一視している (ibid.)。習慣的行動の無意識は、「無い意識」すなわち完全な自動性ではなく、意志的な何ものかを保持して

いる「無くされた意識」なのである。

さらにベルクソンは、本能的行動を或る種の認識と看做している。ただしそれは、演じられる（jouée）認識、無意識的な認識である。或る種類のハエは、動物の体に生みつけた卵が最終的に動物の体内に入り孵化し成長するはずだということを、あたかも知っている（savoir）かのように行動する。これは「暗黙の（implicite）」認識であり、「内面化して意識になるのではなく、外面化して的確な歩み（démarche）となる」（EC147）。本能に従う動物は行動することによって対象を認識しているのである。このことは、我々においても「再認の原初的条件（condition primordiale）」（MM107）としてまず身体の行動の水準があることと符合する。ベルクソン自身もこう書いている。「感情という現象、非反省的な共感や反感において、われわれは、もちろんはるかに漠然としていてあまりにも知性に浸透した形の下においてであるが、本能によって行動する昆虫の意識に生ずるはずのもののうちの何ものかを、われわれ自身において経験する」（EC176）。

おわりに

我々は、身体は単なる知覚イマージュには還元されないことを確認しつつ、むしろ知覚イマージュを可能にする「行動の中心」としての身体を取りだした。それは「自ら動く傾向」あるいは「運動的活動性」としての身体である。我々はこの身体を情感的感覚によって「内から」知る。一方、こうした「感覚＝運動」的身体は、「私の現在」を生み出しつつある時間的な存在でもある。身体は自らの未来を自己決定していく「非決定性の中心」である。そこには或る種の自由があり、我々は生物の感受性あるいは本能的行動にそのモデルを見出した。この自由はたしかに必然性と背中合わせになっているが、むしろまさにそのために「自由の端緒（commencement de liberté）」（DI25）として肯定すべきであろう。

注

ベルクソンの著作からの引用・参照は、次の略号と頁数の併記によって示す。

DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience*, P.U.F., 1991
MM: *Matière et mémoire*, P.U.F., 1990
EC: *L'évolution créatrice*, P.U.F., 1991
ES: *L'énergie spirituelle*, P.U.F., 1990
PM: *La pensée et le mouvant*, P.U.F., 1990
M: *Mélanges*, P.U.F., 1972

（1）「もし、不可入性が現実に物質の一性質であり、感覚によって知られるのであれば、抵抗のない表面や重さのない液体よりも、互いに透入しあう二つの物体を考える方に大きな困難を感じる理由が分からない。事実、二つの物体が同時に同じ場所を占めることはできないという命題に結びついているのは物理的次元の必然性ではなく、論理的必然性である」（DI66）。

(2)「不可分なものの中に下位的分割を、ただ潜在的にだけでなく現実に見出すこと」が「客観性」であるならば (DI63)、その表面の「数と拡がり」が計測され、数的多数性において表象されることによって知られる身体とは、いわば客観的身体であるといえよう。

(3) 多数の瞬間を唯一の直観に収縮する記憶力の働きは、直接的知覚の基底を記憶の層で覆う記憶力の働きから区別される (MM31)。記憶力の二形態の区別は『物質と記憶』においてしばしば登場するが、そのすべての箇所で一致しているかどうかは解釈の分かれるところであろう。たとえば、第一章と第四章そして結論部において提示される記憶力の二形態 (MM31, 76, 256) と、第二章と第三章で提示される記憶力の二形態 (イマージュ記憶と運動の記憶) との間に対応関係を見るならば、収縮する記憶力を身体の記憶力として解釈することもできよう。

(4) 正確には「準瞬間的切断 (coupe quasi instantanée)」(MM154) とある。これを「私の現在」が必然的に占める「持続の或る厚み」の表現ととることは可能である。

(5) 一般観念の議論はしばしば、「一般化するためにはまず抽象しなければならないが、有効に抽象するためにはすでに一般化できなければならない」(MM174) という循環に陥る。ベルクソンは、議論を「個別的なもの」の知覚から出発させないことによって循環は回避可能だと考える。さらにいえば、個別的諸観念相互の連合によって観念連合を説明する連合説に対してベルクソンがその理論的な困難を指摘するとき、結局一般観念の議論と同種の循環をそこに看破していたように思われる。潜在的なものを現実化する運動としての記憶力の働きは「運動図式」と同様〈図式〉的な構造を成しているのであり、したがって〈図式〉論一般はベルクソン独自の認識論なのである。

(6)「運動図式」は「身体的態度」(MM116, 134) であり、そこには或る種の「精神的態度 (attitude mentale)」が組み込まれているとされる (MM134)。また、適切な身体的態度をとることは、身体が対象を理解する (comprendre) ことだとされる (MM122-123)。よって、『物質と記憶』では未だ「身体的努力」(ES178) と「知的努力」との区別が判明になっておらず、マディニエの指摘するように、「運動図式」は「動的図式 (schèma dynamique)」(ES161, etc.) を部分的に含んでいる (G. Madinier, *Conscience et mouvement*, Béatrice-Nauwelaerts, 1967, p. 389)。

付言すると、マディニエは「動的図式」の方に価値を置く。「動的図式は運動図式を必要とするが、自らのために運動図式を創造し構成する動的図式がなければ、運動図式は無力である」(*ibid.*, p. 391)。しかし、この解釈はいささか偏重にすぎるものであって、二つの記憶力の相互扶助を主張し (MM169)、場合によってはむしろ身体の働きの方に「再認の原初的条件」を認めるベルクソンの説に抵触するのではないか。

(7)「図式を構成する反復は、要素的運動の各々に対して自律以上のものと同時に相互の連帯以上のものを与える、すなわち全体を分解しかつ再構成する」(G. Madinier, *op. cit.*, p. 387)。

(8)「〈無秩序〉と〈無〉は、現実には或る現存 (présence) ―我々の関心を魅かず我々の努力や注意を落胆させる或る事物や或る秩序の現存を指示する」(PM67-68)。同様の議論は『創造的進化』にも見られる (EC221-238)。ベルクソンによれば、無秩序や無は、単に語 (mot) や観念の幻影にすぎず、無意味な「声の風 (flatus vocis)」にすぎない。感覚の多様を仮定する限りにおいてカントの認識論も批判対象となる。

(9) マディニエは「自発性であり、知的な再構成と刷新とを許容しうる柔軟な自動性」(G. Madinier, *op. cit.*, p. 387) と呼んでいる。

(10) ベルクソンは『試論』の自由論を回顧してこう述べている。「自由は (以上から)、人がそう言ったように、決して感覚的自発性に還元されるのではない。せいぜい動物においてそうであろう、動物の心理的生活はとりわけ情感的だからである。しかし、思考する存在である人間においては、自由行為は感情と観念との総合と呼ばれうるのであり、自由行為に至る進展は合理的進展と呼ばれうるのである」(MM207)。この

弁明は、『試論』の自由論に対してなされたレヴィ＝ブリュールとブロの批判を受けたものである（詳細については *Œuvres*, P.U.F., 1991, pp.1552-1553 参照）。しかし、『物質と記憶』第一章の「自由」はむしろ感覚的自発性を指しており、人間においても身体的運動の水準では肯定されるべき自由なのである。

（たやすこうじ　大学院博士後期課程）